

MATSU REKI

二〇二四年
夏号

7

特別展

「月照寺と

松平家の宝
開催

月照寺開基

360

周年記念

高真院(松平直政)廟門(島根県指定文化財)と墓

CONTENTS

- 2-3 | みどころ紹介
企画展「松江のスポーツ今昔」
特別展「月照寺と松平家の宝」

- 4 | 新収蔵品紹介
5 | コラム
雲陽秘事記あらかると 第6回
(名誉館長 藤岡大拙)
6 | 松江おもしろ談義ダイジェスト

- 7 | 松江歴史館のお仕事
—保存管理について②—
INFORMATION
8 | 地域ゆかりの資料紹介
—八雲町編—

1.



じましんりゅうじゅうどう かっちゅうしょ さ
直信流柔道甲冑所作
 (大正4年撮影、個人蔵)

松江藩で行われていた武術の内の体術を直信流柔道といいます。当初は「直心流柔」と称していましたが、享保9年(1724)に「直信流柔道」と改めました。講道館柔道が柔道の名を使用するより約150年前に日本で初めて「柔道」と称した武術でした。直信流柔道の形の多くは、一撃で相手を倒す実戦的なものです。写真は刀を投げ捨てて組み合い、相手を組み伏せて首級を挙げ、首実検に及ぶまでの戦場での組討ちを想定した甲冑所作です。

2.



相手を倒して
 首をもぐ

3.



4.



企画展

松江の スポーツ今昔

2024

7.12<金>→9.16<月・祝>

松江体育協会
 創立100周年記念

世界最速の足を

支えたスパイク

よしおかたがよし
吉岡隆徳のスパイク
 (昭和7年、当館蔵)

当時の100m世界タイ記録10秒3を二度マークし、「暁の超特急」と称された吉岡隆徳がレースで履いたスパイクです。軽く柔らかいカンガルー皮を使用したスパイクは、昭和7年(1932)に開催するロサンゼルスオリンピックの代表選手となった際に友人らから贈られたものです。吉岡は、想いが込められたこのスパイクを履くと自然と力がわいたと述べています。ロサンゼルスオリンピックの決勝、世界記録や日本記録をマークした時に履いていました。



松江体育協会創立100周年を記念し、松江における江戸時代から現代までのスポーツについて取り上げます。江戸時代のスポーツといえは武術、松江藩では剣術の「不伝流居相」「新当流兵法」「槍術の」「指流管槍」「櫻原流鍵槍」、柔道の「直信流柔道」が御流儀と呼ばれ行われました。近代になると大日本体育協会会長となる岸清一の推奨により、松江体育協会が結成されて多くのスポーツ選手が活躍しました。本展では、「柔道」という名称を日本で初めて使用した直信流柔道や近代松江のスポーツについて紹介します。

企画展情報

休館日 毎週月曜日
 ※祝日の場合は翌平日が休館。ただし、8月13日(火)は開館。
 開館時間 9:00-17:00(観覧受付は16:30まで)
 会場 松江歴史館 企画展示室
 主催 松江歴史館
 観覧料 大人500円(400円) 小・中学生100円(80円)

※ 高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金
 ※ 基本展示室とのセット券の料金は大人800円(640円)、小・中学生300円(240円)
 ※ ()内は20名以上の団体料金

「月照寺と松平家の宝」



島根県指定文化財 大圓庵（松平治郷）廟門

初夏には美しいあじさいが咲く寺として知られる月照寺。松江にお住まいの方ならば、一度は訪れたことがあるのではないのでしょうか。月照寺は浄土宗の寺院で、松江平家の歴代藩主が眠る墓所です。初代・直政の生母・月照院を弔うために開かれ、二代・綱隆によつて菩提所とされました。藩主それぞれの墓には廟門が堂々と備わり、墓所として国指定の史跡にもなっています。また月照寺には、七代・不昧の「御茶器帳（雲州蔵帳）」をはじめとする松平家ゆかりの貴重な宝物が多数伝わっています。本展は月照寺の開基360周年を記念して開催し、墓所としての様相や宝物の数々を紹介します。

2024 ※会期中一部展示替えがあります。

10.4<金>→11.24<日>

特別展情報

休館日 毎週月曜日 ※祝日の場合は翌平日が休館。

開館時間 9:00-17:00 (観覧受付は16:30まで)

※10月4日(金)のみオープニング式典のため展示室は9:30開場

会場 松江歴史館 企画展示室

主催 松江歴史館 特別協力 歓喜山月照寺

観覧料 大人600円(480円)、小・中学生300円(240円)

※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金

※基本展示室とのセット券の料金は大人880円(700円)、小・中学生440円(350円)

※()内は20名以上の団体料金



重要文化財 「遠浦帰帆図」
伝牧谿筆
(中国・南宋時代、京都国立博物館蔵)
※10月4日(金)～27日(日)のみ展示。

中国・南宋時代の僧で画家の牧谿が描いたとつたわる水墨画です。「遠浦帰帆図」とは、中国の景勝地を描いた伝統的な画題「瀟湘八景」のうちの一景です。本作は室町将軍の足利義政や茶人の村田珠光、徳川家康らの手を渡ったのちに不昧の所蔵となり、大切にされてきました。月照寺には、不昧の蔵品目録である「御茶器帳（雲州蔵帳）」が伝わっていますが、その中で最高ランクの「宝物之部」に分類されています。

島根県指定文化財 「騎獅文殊菩薩像」
(鎌倉時代、月照寺蔵)

雲上の獅子に坐す文殊菩薩。全身が金色で塗りこめられ輝きを放っています。本図はもともと出雲大社が所蔵していましたが、江戸時代初期に出雲大社でおきた神仏分離の動きにより同社を離れ、松江藩松平家二代藩主・綱隆の手に渡りました。それを綱隆の死後に側室の養法院が月照寺へ寄附したのです。これらの経緯は養法院筆の文書に詳しく記されていますが、本図を奉納した理由は綱隆の霊を弔うため、そして子孫が長く久しく続くことを祈るためだとあります。これによって奉納の経緯がわかるのです。月照寺が藩主家にとって大切な菩提寺であったことを改めて示すのが本作ともいえましょう。



新

収蔵品紹介

松江の画家が見た 北海道の風景



令和5年度 寄贈 草光信成作《北海道風景》(釧路、1963年)

緑が生い茂る、広々としたさわやかな風景です。画面の左下のサインからこの絵が画家・草光信成によって描かれたことがわかります。草光は松江市母衣町で育ち、東京美術学校で学びました。本作の左側に描かれた建物は、草光の四男とその妻が住んだ北海道釧路市の社宅だといひ、草光もここに滞在しました。また北海道には農業専門学校「八紘学園」(札幌市)創設者で草光のパトロン(くりばやしもとじろう)がいたこともあり、草光は数度北海道を訪れているようです。本作の他にも、草光が描いた《釧路港風景》(制作年不詳)や《札幌創成川風景》(1965年)などをあわせて受贈しました。

松江藩のお抱え窯・永原窯の 初期作品「黄釉唐草文杯洗」

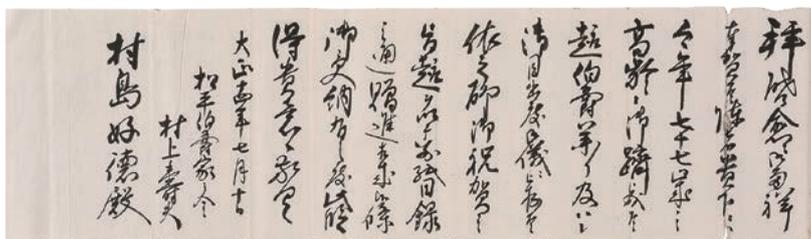
松江藩には、藩主の趣向に沿った作品を作る3つのお抱え窯がありました。そのうちの一つである永原窯は、文化13年(1816)に、松江藩から御茶碗師を命ぜられ、御用窯となった布志名焼の窯元です。

本作は、永原窯の初代である永原与蔵順睦が制作したと考えられる作品で、酒杯を洗うための杯洗と杯を置く杯台が兼用できる台です。杯台となる蓋を開けると、水を入れて杯を洗うための器が設けられています。本作は、布志名焼特有の黄釉を地とし、色絵で唐草文を描き、台の脚裏に「雲与」の小判型の印があります。初代与蔵順睦と二代与蔵建定の作品は現存数が非常に少なく、本作は、江戸時代の松江藩御用窯の足跡を示す重要な作品です。



令和5年度 購入 永原与蔵順睦作「黄釉唐草文杯洗」

松江歴史館では、歴史資料や美術作品を中心に、収集方針に基づいて資料を収集しています。松江市域あるいは江戸時代の出雲国の歴史や文化を語る上で欠かせない資料、山陰地域、日本さらには世界の歴史や文化にとって重要な資料が地域から失われるのを防ぎ、後世へ受け継ぐとともに、その価値を調査・研究・展示によって発信していきます。



令和5年度 寄贈
上:村島家文書より
「村島好徳宛村上壽夫書状」
下:葵紋蒔絵杯

旧藩主から賜った祝いの杯

旧松江藩士村島家に伝わった木杯です。大正14年(1925)に村島好徳の喜寿を祝し、旧君松平直亮が贈った品であることが、松平家家令村上壽夫からの書状でわかります。朱塗の杯の見込には、松平家の家紋が蒔絵で描かれています。松江藩士としての村島家は、正保元年(1644)に馬医として登用されたことに始まります。7代目に鷹方へ出仕する家から養子を迎え、以来70石を給する鷹匠を家業としました。村島好徳は11代当主として明治時代をむかえた、松江藩最後の鷹匠の一人です。杯拝領の礼状では、明治時代に旧藩主の来松を記念して結成した旧藩士の集会「保義会」の会員を肩書として使っており、かつての主従の交流がうかがえます。



雲陽秘事記

あらかると

松江歴史館 名誉館長
藤岡 大拙



雲陽秘事記

何時、誰が著したか分からないが、人から人へ書き写されて伝わった逸話集。松江藩松平家初代藩主直政から六代宗衍の時代までが取り扱われ、後、八代藩主斉恒までが追記された。収録された約二百話にも及ぶ記事は、虚実混交の憾みがあるとはいえ、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢に分け入れることができる。

第6回

柳多四郎兵衛の諫死

松平治郷(不昧公)の父宗衍は、三歳にして藩主となったが、初めて出雲に入国したのは、八歳の時だった。駕籠で江戸から松江まで、およそ二十三日を要した。成人の殿さまでも大変な道中だが、八歳の子どもとなれば、ずいぶん苦しい旅だったに違いない。雲陽秘事記「宗衍公初て御入国の事」に次のような記事がある。

いよいよ松江城へ到着した。家老たちが迎え、書院へ案内した。そして家老たちは、かわるがわる、「道中御障りもなく、御入国遊ばされ、恐悦至極(この上もない歓び)に存じたてまつります」と申し上げた。

この時、筆頭家老大橋茂右衛門は、幼君宗衍のそばに寄り、手ずから宗衍の髪を撫で、

「さても危ないことだったなあ。御

幼少の君を長の道中、お駕籠に乗せて振り立てる。もしものがあれば、どうしただろうか。それなのになんぞや、御入国恐悦などは、この茂右衛門は、

このたびの御入国を恐悦などとは、とうてい言えない。『危うき御事にて御座候』だ。恐悦至極は、今から十年後に言う言葉だ。拙者はその日を待ち申し上げているのだ」と言いつつ、涙を流した。江戸からお伴をして帰ってきた、江戸家老柳多四郎兵衛は、大橋のこの言葉に、深く共鳴するところがあった。

それから何年経ったであろうか。宗衍は財政難や災害対策などに、寧日(いともまない程)であった。そんなある日、宗衍は柳多を呼んだ。

「ほかでもない、余が次男駒次郎(松平衍親)に、神門郡六万石を分知し、塩冶村に政庁を置き、家中(家来)も住まわせようと思うが、そちはどうじゃ」

これを聞いた柳多は、頭を振って、言下に答えた。

「それはなりません。神門郡六万石を駒次郎様に分与されると、松江藩領の最も肥沃な田地がなくなってしまいます。しかも、藩領の三分の一が、

甚だよろしくありません。どうかこの計画は、御取りさげください」

「そちはさておき、国の家老衆はどう思うか、相談してみてくださいぬか」

「いえ、家老衆の意見を聞くまでもありません。この柳多の目の黒いうちは、この儀はあいなりません」

しかし、宗衍も後へ引かなかった。柳多はその夜宿舎に帰って、諫死の切腹をとげた。三十八歳であった。このことを聞いた宗衍は、大いに驚き、早く、余の間違いだったことを知らせよ、と言ったという。

柳多は君主の為に一命を捧げた。何故そこまで。雲陽秘事記「柳多四郎兵衛、太守を諫める事」は次のように記している。

「惜しいかな、柳多の忠臣三十八歳にして君の為に一命を果たしける。是先年、宗衍公御幼少にて、御初入に付、大橋氏の大言(すぐれた言葉)、柳多の胸に徹し、まさかの時は君の御用に達せんと心懸しもの也」

松江 おもしろ談義 ダイジェスト

松江歴史館では、毎月1回1時間、毎回異なるテーマを設けて、松江の歴史やゆかりの美術のお話をする「松江おもしろ談義」を開催しています。今回は令和5年9月の講演の内容をダイジェストでお届けします。

松江城下の橋と擬宝珠

嘉永3年(1850)の松江城下町絵図には、32本の橋が描かれています。現代の地図と照らし合わせ、一つ一つ訪ねてみると、今も23本の橋が、江戸時代と同じ辺りに架かっていました。松江城下の橋の大半は、城をめぐる堀に架かるものです。水路を埋め立て、道路に変えたことにより無くなった橋もありました。それでもなお江戸時代以来の橋が多くあるのは、残っている堀も多いということです。

この松江の城下町を「縦横に貫いている川の水とその川の上に掛けられた多くの木造の橋と」に魅せられた作家がいました。大正4年(1915)に松江を訪れた芥川龍之介です。彼は『松江印象記』にこう書いています。

ことにその橋の二、三が古日本の版画家によって、しばしばその構図に利用せられた青銅の擬宝珠をもって主要なる装飾としていた一事は自分をしていよいよ深くこれらの橋梁を愛せしめた。松江へ着いた日の薄暮雨にぬれて光る大橋の擬宝珠を、灰色を帯びた緑の水の上に望みえたなつかしさは事新しくここにきかたるまでもない。

芥川を惹きつけた、青銅の擬宝珠で飾られた橋。擬宝珠とは、ネギの花に似た宝珠形の、親柱や欄干を飾る金物のこと。江戸時代の松江の地図や絵画の橋の図面を調べると、北から京橋、大橋、天神橋に擬宝珠の表現がありました。これらの橋は、参勤交代における藩主の行列の通り道で、松江城下のメインストリートといえるでしょう。その姿は、大名のお成りにふさわしい格調高いものでした。

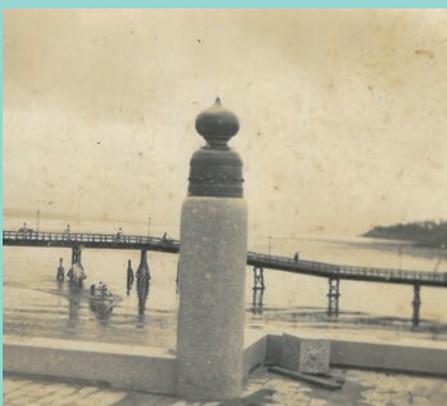
大橋(松江大橋)は現在も、擬宝珠で装飾する古風な姿を留めています。城下町誕生の頃にできた初代大橋から数えて17代目にあたる松江大橋は、昭和12年(1937)に竣工しました。17代松江大橋を飾る20基の擬宝珠は特別で、先ず以て巨大です。高さ約70センチ、胴回りは1メートル以上あります。全て青銅製の铸造品で、原型を島根県出身の彫刻家内藤伸が手掛けました。

しかし当初の擬宝珠は、架け替えからわずか6年後の昭和18年(1943)に、金属類回収令により供出することになりました。代わりに橋を飾ったのが陶製の擬宝珠です。松江大橋の陶製擬宝珠を製造したのは、出雲市にある萬祥山窯でした。陶製擬宝珠の内側に

は「萬祥山」の落款があります。

松江大橋に青銅製の擬宝珠が戻ったのは、終戦から20年近く経ってからです。製作したのは松江市栄町にあった遠所美術铸造所です。遠所美術铸造所では内藤伸設計の石膏原型を保管していました。所長の遠所長太郎は、これを以て青銅製の擬宝珠を復元することを島根県に訴えたのです。遠所は見書で、内藤が自ら手を加えた原型により、架設当時そのままの姿を復元できるため、名橋にふさわしい芸術的秀品の製作を懇願すると述べています。意見書の効果は不明ですが、昭和38年(1963)に遠所美術铸造所へ8基の青銅製擬宝珠製作の注文がありました。その後も徐々に取り替えが進み、昭和49年(1974)に最後の1基の注文があり、全ての擬宝珠が青銅製に戻ったのです。

(副主任学芸員 笠井今日子)



17代松江大橋の擬宝珠(昭和12年頃)
松江大橋は架設途中で、背景に木製の仮橋が見える。

松江歴史館の お仕事

保存管理について② 虫との攻防

松江歴史館の収蔵資料は、文書や絵画、木製品など多岐にわたります。それら文化財は、いずれも虫が食せるものが多く、文化財に対して被害を生み出す虫を「文化財害虫」といい、博物館では日々、収蔵庫や展示室に文化財害虫が入らないよう対策を行っています。文化財害虫が収蔵庫に入ってしまうと、資料が食べられたり、虫が出す糞などで資料が汚れたりして、被害が広がるためです。対策の一つとして、外から入ってくる資料は、収蔵庫に入らず、まず一時保管庫という場所で保管します。資料に



歩行性昆虫調査トラップ
右側の薄型で目立ちにくいデザインのトラップは展示室で使用する。

生息している可能性のある虫を二酸化炭素で殺虫してから、収蔵庫に資料を入れています。

また、虫の種類、侵入経路、季節における虫の増減などを確認するために「歩行性昆虫調査トラップ」を設置したり、博物館内で虫を発見した際は、学芸員へ報告してもらったり、様々な対策を行っています。文化財を後世に伝えるために、博物館の職員全員で虫への対策に取り組んでいます。



ドンザ(松江市蔵)

INFORMATION

松江歴史館からのお知らせ

“新”登録有形民俗文化財 「ドンザ」を展示しています!

松江歴史館では令和6年(2024)3月21日に国の登録有形民俗文化財になった「島根半島沿岸及び宍道湖・中海の漁撈用具」1,598点のひとつ「ドンザ」を展示しています。ドンザは海仕事をする時に着る仕事着です。主に女性用の着物で、布を何枚も重ねることで、寒さを防ぎ、水が入り込まないようにしてあります。袖口に向かって狭くなっている袖の形は、作業のじゃまにならないための工夫です。日本海の浜辺で働く人々の姿が思い浮んでくる、味わい深い一品です。

ドンザは基本展示室でいつでも見ることができます。

わがとこに、 何があるかね？

出雲弁で「わたしたちの地域に何があるの?」という意味

松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。



八雲町編

松江のものづくり —比類なき轆轤師・小林幸八—

松江市八雲町は、松江市の南に位置し、出雲国一之宮として古くから信仰を集めている熊野大社が鎮座する町です。八雲町を代表する偉人としては、重要無形文化財保持者に認定された紙漉き師の安部榮四郎がいます。

自然と文化あふれるこの町に、幕末から昭和にかけて工芸を支えた職人がいました。轆轤師・小林幸八です。小林幸八は、初代と二代とで二人います。

二代小林幸八(本名安達真市、一八七八—一九三五)は松江市八雲町熊野出身の木地師です。初代小林幸八(生年不詳—一九二〇)に木工轆轤を習った二代幸八は、盆や蓋物・棗・香合を多く制作し、数々の賞を受賞しました。二代幸八が使用した道具や未完成品などは、八雲町の指定文化財に指定され、八束郡七町村と松江市の合併後、松江市の指定文化財(有形民俗文化財)になりました。

木工は、重厚感ある木の質感や木目の美し

さを活かす工芸です。木工芸には、木材の取り扱い方により、「挽物」「指物」「割物」「曲物」「彫物」といった様々な技法があります。その中で、二代幸八が行った「挽物」とは、大まかに成形した木材を、轆轤という回転する道具に取り付け、轆轤鉋という刃物を木材にあてて、削り成形していく技法です。挽物は、轆轤鉋をあてる力加減や傾きで、すぐに木材の形が変わってしまうため、繊細なコントロールが必要で、また、湿度によって木材の形が変化するので、棗のように蓋と身がずれてはいけない器を作るためには、木材の性質を理解していなければいけません。

指定文化財(有形民俗文化財)の中には、棗や茶托、金平糖入れなど珍しいもの、蓋の内側と外側に別の木材を使って作った刻みたばこ入れのほか、工房の看板なども含まれています。(副主任学芸員 大多和弥生)



工房看板「小椋堂轆轤師 二代小林幸八」(松江市蔵)



二代小林幸八作「金平糖入れ」(松江市蔵)



二代小林幸八作「棗(未完成品)」(松江市蔵)